

二〇二五年度

一般入試Ⅱ 入学試験問題

国語（五十分）（全十三ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子高等学校

一 次の各文の——線を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 彼は負債を返済する必要がある。
- (2) 風に翻る旗が青空に映えて美しい。
- (3) 青い海を帆船が優雅に進んでいる。
- (4) 機械を潤滑に動かすために油をさす。
- (5) 街の中心の鐘楼が美しい音色を響かせる。

二 次の各文の——線を付けたカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 彼は結果にマンエツの表情を浮かべた。
- (2) 彼女は毎晩スイハンを担当している。
- (3) 市役所にコセキ謄本を取りに行く。
- (4) 事業の立ち上げにタズサわる。
- (5) 敵の行く手をハバンで時間を稼いだ。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

せいや、というのは、浅草の三社祭りで、御輿みこしの担ぎ手が出す掛け声である。一方、東京深川の富岡八幡宮の夏祭りでは、必ず、わっしょい、と声を出す。わっしょいのなかに、せいやが混じれば、それは相当にしらけるものであろうし、せいやのなかにわっしょいが聞こえれば、どこのものだと思われるはずである。それでなくても、祭りという磁場には、縄張り意識が強く働く。たった、これだけの短い言葉なのに、いや、短い言葉だからこそよけいに際立って、「せいや」と「わっしょい」は、水と油みたいに、けっして混ざり合うことがない。浅草も深川も、距離で計れば、それほど遠い場所ではないのに、①このふたつの掛け声は、違う国の、違う宗教ほども違ってみえる。

わたしが知るのは、「わっしょい」のほうである。

深川の祭りは、水かけ祭りとも言う。その名の示すとおり、通過する御輿と担ぎ手に向かって、冷たい水を、ばしゃばしゃかけるのだ。お祭りというものは、そして御輿をかつぐということは、水をかけることであると思っていたので、ほかの土地で、乾いたはっぴを着たかつぎ手を見たときは、あじけなきとのんきさを感じたものだった。

水をかけるほうが特異なのだと知ったころ、わたしは大人になり、この町を出て暮らし始め、ようやく、自分の育った町を、外側から眺められるようになった。

(中略)

本祭りの年には、江東区、中央区の各町会から、総勢、五十四基ほどの御輿が繰り出し、長い列を作つて、通りを練り歩く。

男たち、女たちが羽織るはつぴも、炎天下、乾いては濡れ、濡れては乾く。なかにはみづことな刺青いれずみの者もいて、はつぴからちらつとこぼれて見えるそれは、すべてが見えないために、いっそう恐ろしく視線を引きつける。夏の焼けた地肌の奥のほうから、どんよりと鈍い色素を発した赤や青の色彩は、すでに長い年月を経ていることを物語っており、彫り込みを入れたその者の、消すに消せない年月を、見世物のように披露するのだった。

いつか、じっくり時間をかけて、この「刺青」というものを見てみたいものだ。今に至るまで、煮詰まるような、そんな願望を持っているが、刺青をじつと見ることは、そのひとの内面まで、あばいてひろげるようなことにもなりかねず、その恐ろしい美を、一瞬のうちに目に入れて、即座に目をそらすのが、わたしのような小娘が刺青を見るときの習いにもなっていた。

朝早くから夕方近くまで、長い道のりを歩くため、昼食時を含めた御輿の休憩時間がある。昼食は、大通りをはずれ、小さな路地に入ったところをみはからつて取られ、大勢の担ぎ手が、そのとき、いっせいに歩みを止める。そんなとき、男たちは、はつぴを脱ぎ、多くは上半身裸となる。赤銅色ということばがぴったりの、日焼けして赤黒い男たちの肌。酒でも飲んでいいのか、あるいは汗や水が目に入ったのか、それとも、御輿を担いだ興奮の

ためなのか、多くの男の目は充血している。御輿を離れ、ある者は日陰の道端にしゃがみこみ、おにぎりをおぼる。ある者は、ガードレールに腰をかけて、配給されたたばこに火をつける。

②御輿からほどかれて、ひとりひとりの肉体が、あちらこちらに、ぽつん、ぽつん、と孤島のように点在している。この世に無造作に捨て置かれたというように、ひととき群れから離れた肉体を、わたしはいつも、まぶしい思いで眺めた。そういうときの彼等の肉体は、御輿のための担ぎ手という役目を背負つて、もはやこのだれという名を捨てている。それぞれが富岡八幡宮のカミサマに捧げられた、供物のようなすがすがしさである。

さらに目を凝らせば、担ぎ手のなかの幾人かは、肩に、盛り上がった、まつかなこぶを作っていた。御輿を担いだただけにできる、あれはきわめて特殊なこぶである。

その不気味な様相は、まるで、何か別のイキモノが、肩のうえで密かに生息しているようだ。こぶに目鼻をつけたなら、しゃべりだかと思われる。いつまでも見ていると怒られるだろうか、でも見ていたい、ずっと見つめていたい。そう思わせるような、グロテスクで魅力のあるこぶなのであった。

一方、女たちは、どうだろう。

鋭くまっすぐに引き伸ばされた肩、切れ長の目元、真っ赤な口紅。髪はひとつめて、後ろで丸めてお団子を作る。仕上げには、額にかかるように、豆絞りの手ぬぐいで、鉢巻をする。随分と画一化されたファッションだ。「型」というものが、こうしてはつきりと決まっているから、最初はこの女性も同

じように見えるのだが、よく見ているうちに、どの女性からも、型からはみだす何ものかが見えてくる。それを「個性」とか「色気」と呼ぶのだろう。

③これは、俳句や短歌でも同じではないだろうか。型があるから、あふれるものがある。型が一種の抑制装置となっていて、抑制がかかればかりのほどに、言葉があばれ始めて躍動する。躍動したのちにあふれ出たものが、言葉にならぬ余韻であり、定型は、そのたった一滴を生け捕りにするために、しつらえられた装置なのである。

祭りの渦のなかに存在する男女もまた、④かけがえのない「一滴の生」を得るために、あのわけのわからない喧騒のなかに身を投じるというわけなのだろうか。それは小さな女の子にもすでに見てとれる。自意識というものが、もうあるのか、ないのか、一人前に結い上げられた髪、鼻の頭に塗られた赤い紅、ぼつてりと口紅をさしている子もいて、そこには、どきつとするような媚びと色気が見えた。

⑤女たちの、かけ水に濡れた細いうなじ、うなじにはりついた後れ毛のみだれを、わたしはどれほど、見てきたことだろう。

（小池昌代『感光生活』より。なお、本文には省略等がある）

問一 傍線①「このふたつの掛け声は、違う国の、違う宗教ほども違ってみえる」とあるが、その理由として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 祭りの掛け声は縄張りの違いを際立たせるため、地域特有の言葉で構成されているから。

イ 祭りの掛け声は短いからこそ違いが際立つため、御輿の担ぎ手の意識に大きな影響を及ぼすから。

ウ 縄張り意識が強く働く祭りでは、御輿の担ぎ手の掛け声が互いに相容れないものと感じられるから。

エ 縄張り意識が強く働く祭りでは、掛け声が混ざり合うことがないように特異な言葉を使っているから。

問二 傍線②「御輿からほどかれて、ひとりひとりの肉体が、あちらこちらに、ぼつん、ぼつん、と孤島のように点在している」とあるが、どういうことか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 御輿を担いでいた大勢の担ぎ手たちが、一斉に担ぎ手という役目から解放されたことでやるべきことを失くし、思い思いの行動をしながら次にやるべきことを模索しているということ。

イ 御輿を担いでいた大勢の担ぎ手たちが、役割を終えた休憩時間にも担ぎ手という役目を背負ったまま、それぞれに祭りの余韻を感じながら充実した時間を過ごしているということ。

ウ 御輿を担いでいた大勢の担ぎ手たちが、担ぎ手という役目を終えた瞬間に祭りの一員としての意識を捨て、疲れた体を癒すためにそれぞれの居場所へと戻っていくということ。

エ 御輿を担いでいた大勢の担ぎ手たちが、役割を終えてそれぞれの居場所に戻った後も祭りの余韻から解放されず、一人で過ごす時間に孤独を感じているということ。

問三 傍線③「これは、俳句や短歌でも同じではないだろうか」とあるが、これを説明したものととして適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 祭りの衣装を身にまとった女性たちは一見同じように見えるがその中に「個性」があるように、俳句も定型の中で使われた言葉から余韻を感じられるということ。

イ 祭りに参加する女性たちは画一化されたファッションを身にまとうことで祭りへの意識を高めるように、俳句も定型の中で表現することを通して言葉への意識が高まるということ。

ウ 祭りに参加する女性たちの服装は個性豊かであるがその中に共通点を見いだせるように、多くの言葉を用いる俳句も型があることで言葉が抑制され統一感が生まれるということ。

エ 祭りに参加する女性たちは決められた服装に個性を付け加えなければならぬように、俳句も定型に当てはめた言葉の中に自分だけの表

現を示さなければならないということ。

問四 傍線④「かけがえのない『一滴の生』を言い換えた言葉として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 仲間と御輿を担ぐことで得られるその場限りの高揚感。

イ 御輿を担ぐ者だけが感じられる祭り特有の一体感。

ウ 仲間と御輿を担ぎながら掻き立てられる闘争心。

エ 御輿を担ぐ大勢の中で発揮される自意識。

問五 傍線⑤「女たちのく見てきたことだろう」とあるが、ここから読み取れる筆者の様子説明として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 画一化されればされるほどあふれ出る一人ひとりの女たちの個性に思いを馳せ、祭りの渦の中に一瞬の輝きを放つ生の余韻に浸っている。

イ 水かけ祭りという深川の特異な祭りをなつかしく思い起こし、画一化されたファッションに象徴される女たちの絆を頼もしく感じている。

ウ わけのわからない喧騒のなかに身を投じ、冷たい水をかけられながらも、伝統を受け継ぐとする女たちのたくましい姿に圧倒されている。

エ 「型」というものがはつきり決まっているからこそ、祭りの喧騒のなかにあっても、統一された身のこなしができるということを実感している。

四 次の記事を読んで、あとの各問に答えよ。

「死」は絶対的な悪の存在ではなく、全生物にとって必要なものです。(中略) 生物はミラクルが重なってこの地球に誕生し、多様化し、絶滅を繰り返して選択され、進化を遂げてきました。その流れの中でこの世に偶然にして生まれてきた私たちは、その奇跡的な命を次の世代へと繋ぐために死ぬのです。命のたすきを次に委ねて「利他的に死ぬ」というわけです。

(中略)

人間社会は現在、集団を大切にする考えから、より個人を大切にする考え方への転換という意味で大きな分岐点にあります。ヒトは、集団(社会)で進化してこられました。複雑な言葉も豊かな表情やジェスチャーも、全てコミュニケーションのために発達してきたのです。本書でお伝えしてきたように「進化が生き物を作った」と考えれば、コミュニケーションがうまく、より社会的な個体ほど選択されて、子孫をたくさん残してきたのです。

従来のコミュニケーションは、人と直接会って話をするというアナログ的なもので、そこでは、見た目や声の調子、雰囲気などが重要な情報源でした。しかし「存じのように、現在のコミュニケーションツールのメインは、スマホやパソコンといった電子媒体です。(中略)

私の知り合いで、実際にお会いすると温厚で優しい方なのですが、メールでは結構過激なことをスバツと言う人がいます。別の人がメールを書いているのではと思うくらいです。(中略) 私たちはもともと色々な面を持ってい

て、それが(中略)「表現するツール」によって、違って表に現れてくるのです。ある種のアバター(分身)と言ってもいいかもしれません。いろんなアバターがいるのです。デジタルコミュニケーションでは、アバターの出現は日常化してきます。

(中略)極端な話、アバターが人ではなく、AI(人工知能)でも同じことです。AIも人が情報を入れ込むことで、ヒトっぽい存在にすることができま

す。ヒトに創造された人格という意味では、AIもアバターです。(中略)

AIの出現で人類の進化の方向が変わる!?

さて、生物の進化の話に戻りますが、この①アバターもAIアバターも進化によって出てきたわけではなく、ヒトが作り出したいわば「ネット人格」です。彼らは仮想空間で生きていますが、時には友人のようにアドバイスし、確実に我々の生活や生き方に影響を与えます。AIに至っては、ある面においては、ヒトよりはるかに優れていて、画像診断など大変頼りになる分野もあります。ヒトのアバターも、本人とは相当逸脱した人格になる可能性があります。

(中略)

死なないAIとヒトはどのように付き合えばいいのか

もう少し、AIと共存していく社会について、考えてみましょう。AIは何らかの答えを出してくれますが、その答えが正しいかどうかの検証をヒト

がするのが難しいというところが、まず問題です。大切なことは、何をAIに頼って、何をヒトが決めるのかを、しっかり区別することでしょう。

(中略)

機械学習型ではなく、SF映画に登場するヒトのように考える汎用型人工知能はどうでしょうか？ まだ開発途中ですが、さまざまな局面でヒトの強力な相談相手になることが期待されています。②こちらは使い方を間違うと、かなり危険だと思っています。なぜなら、ヒトが人である理由、つまり「考える」ということが激減する可能性があるからです。一度考えることをやめた人類は、それこそAIに頼り続け、「主体の逆転」が起ってしまう。ヒトのために作ったはずのAIに、ヒトが従属してしまうのです。

ではそうならないようにするには、どうすればいいのでしょうか。私の意見としては、決して「ヒトの手助け」以上にAIを頼ってはいけないと思います。あくまでAIはツール(道具)で、それを使う主体はリアルなヒトであるべきです。

「いや、AIのほうが賢明な判断をしてくれるよ」とおっしゃる方もおられるでしょう。しかし、それは時と場合によります。いつも正しい答えが得られるという状況は、ヒトの考える能力を低下させます。ヒトは試行錯誤、つまり間違えることから学ぶことを成長と捉え、それを「楽しんで」きたのです。喜劇のコントの基本は間違えて笑いを誘い、最後はその間違いに気づくことが面白いのです。逆に「悲劇」は、取り返しがつかない運命に永遠に縛られることに、恐怖と悲しみを覚えるのではないのでしょうか。

AIは、人を楽しませる面白い「ゲーム」を提供するかもしれません。しかし、リアルな世界では、AIはヒトを悲劇の方向に導く可能性があります。そして何よりも私が問題だと考えるのは、AIは死なない、ということです。私たちは、たくさん勉強しても、死んでゼロになります。文化や文明を継承するために教育に時間をかけ、次世代を育てます。一世代ごとにリセットされるわけです。死なないAIにはそれもなく、無限にバージョンアップを繰り返します。

(中略)

ヒトが人であり続けるために

進歩したAIは、もはや機械ではありません。ヒトが人格を与えた「エイリアン」のようなものです。しかも死にません。どんどん私たちが理解できない存在になっていく可能性があります。

死なない人格と共存することは難しいです。例えば、身近な死なないヒトがいたら、と想像してみてください。その人とは、価値観も人生の悲哀も共有できないと思います。非常に進歩したAIとはそのような存在になるのかもしれない。

多くの知識を溜め込み、いつも合理的な答えを出してくれるAIに対して、人間が従属的な関係になってしまう可能性があります。私たちがちょうど自分たちより寿命の短い昆虫などの生き物に抱くような、ある種の「優越感」と逆の感情を持つのもかもしれません。「AIとは偉大な」というようなヒトには寿命があり、いずれ死にます。そして、世代を経てゆっくりと変

化していく——それをいつも主体的に繰り返してきましたし、これからも
そうあることで、存在し続けていけるのです。③AIが、逆に人という存在
を見つめ直すいい機会を与えてくれるかもしれません。生き物は全て有限
な命を持っているからこそ、「生きる価値」を共有することができるとは。

同様にヒトに影響力があり、且つ存在し続けるものに、宗教があります。
もともとその宗教を始めた開祖は死んでしまっている、その教えは生き
続ける場合があります。そういう意味では死にません。

ヒトは病気もしますし、歳を重ねると老化もします。ときには気弱になる
こともあります。そのようなときに死なない、しかも多くの人が信じている
絶対的なものに頼ろうとするのは、ある意味理解できることです。AIも
将来、宗教と同じようにヒトに大きな影響を与える存在になるのかもしれ
ません。

宗教は、付き合い方を間違えると、戦争やテロにつながるのは歴史からご存
じの通りです。ただ、宗教のいいところは、個人が自らの価値観で評価でき
ることです。それを信じるかどうかの判断は、自分で決められます。それに
対してAIは、ある意味ヒトよりも合理的な答えを出すようにプログラム
されています。ただ、その結論に至った過程を理解することができないので、
人がAIの答えを評価することが難しいのです。「AIが言っているのぞ
うしましょう」となってしまいかねません。何も考えずに、ただ服従してし
まうかもしれないのです。

それではヒトがAIに頼りすぎずに、人らしく試行錯誤を繰り返して楽

しく生きていくにはどうすればいいのでしょうか？

その答えは、私たち自身にあると思います。つまり私たち「人」とはどうい
う存在なのか、ヒトが人である理由をしっかりと理解することが、その解決
策になるでしょう。

(小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』より。なお、本文には省略等がある)

問一 傍線①「アバターもAIアバターもいわば『ネット人格』です」とあ
るが、このような「ネット人格」が出現したのはなぜか。適切なものを、
次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ヒトよりもはるかに優れているAIは大変頼りになるものなので、現
実の人よりもコミュニケーションを取るうえで都合がよいから。

イ アナログ的なコミュニケーションで重要な情報源だった見た目や声の
調子や雰囲気などが、現在では必要のないものになっているから。

ウ 現在のコミュニケーションツールのメインはスマホなどの電子媒体であ
り、そこでは様々な側面を持つ人間の分身を簡単に作り出せるから。

エ 表現するツールによって表に現れる要素が違ってくるので、現代に必
要な情報を得るために一番適切な情報を見つけ出しやすいから。

問二 傍線②「こちらは使い方を間違えると、かなり危険だと思っています」
とあるが、筆者が考える「汎用型人工知能」の「危険」として適切なもの
を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 汎用型人工知能の出す答えに頼り続けてしまうとヒトは考えることをしなくなり、ヒトのためのものだったAIに、逆に人類が支配される状況に陥ってしまう。

イ 不死の汎用型人工知能は無限にバージョンアップすることができると、ヒトは次世代を育てるために、長い時間をかけることが無意味なことだと気づいてしまう。

ウ 賢明な判断をしてくれる汎用型人工知能には勝てないことがわかると、ヒトはAIに頼り続ける状況となり、間違いから学ぶなど喜劇でしかないとあきらめてしまう。

エ 汎用型人工知能の出した答えを検証することが難しいため、ヒトは考えるという行為の重要性を忘れてしまい、性急に正しい答えを求めていくことに慣れてしまう。

問三 傍線③「AIが、逆に人という存在を見つめ直すいい機会を与えてくれるかもしれません」とあるが、筆者は「人という存在」をどのような存在だと考えているか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 試行錯誤を重ねて答えを出していく「人」は、価値観や感情を共有するため、答えを作る道具に頼ることよりも、死を受け入れることが大切だと気づいている存在。

イ いつでも合理的な答えを導き出すAIに対して、「人」は劣等感のよ

うなものを持ってしまいが、AIを見習いながら、自分を作り変えていこうと努力している存在。

ウ 死ぬと全てがゼロになってしまうとしても、宗教の教えが死なないように、「人」は自らの価値観に照らして、「生きる価値」を新たに捉え直すとしながら生きていく存在。

エ 命に限りがある「人」は試行錯誤を繰り返しながら成長し、時間をかけて次の世代を育てながら、価値観や生きる悲哀を共有することで、「生きる価値」を継承していく存在。

問四 筆者は本文中で、「ヒト」と「人」という語を使い分けている。その表現の意味するものとして適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「ヒト」は仮想空間ではなく現実世界で生きる存在だが、人生の価値判断を他者に頼る、消極的な一面があることを表している。一方、「人」は現実世界での失敗や迷いの原因を考える存在であり、そこから次の行動を修正していく、柔軟な思考力を持つという一面があることを表している。

イ 「ヒト」は合理的な答えを出してくれるAIにいつも頼る存在だが、自分たちの限界も知っている、理知的に従順な一面を表している。一方、「人」はAIの出した答えを疑う存在であり、AIに対抗する思考力を育てるために教育に時間を費やす、情熱的で積極的な一面を表し

ている。

ウ「ヒト」は実際にはリアルな世界で生きる存在だが、考えもせずにくぐに答えを求める、他律的で受動的な一面があることを表している。一方、「人」は現実世界の中で失敗や迷いを経験する存在であり、その経験を生かして成長する、自律的で能動的な一面があることを表わしている。

エ「ヒト」は死なないAIの世界にあらがれる存在だが、次世代へ生命を引き継ぎ、死をも恐れない勇敢な生命体としての一面を表している。一方、「人」はAIを進化させ人間のあらゆる情報をつぎ込みながら、将来は死をも克服したいとする、野望を秘めた生命体としての一面を表している。

問五 国語の授業でこの文章を読んだ後、「ヒトが人らしく生きていく」というテーマで、自分の意見を発表することになった。この時にあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

【五】 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

リアルな大地震の記述

平安時代の文学作品には、災害についての言及などはほとんどなく、社会に起こった事件を詳しく記しているものはまずありません。長年の雅びの伝統からか、現実的な問題をオブラートに包むことなく、何でもあけすけに書き表すのは、はしたないことであるという心性がどこかに働いているのだと思います。これに対して、『方丈記』の文章は他に例を見ないほどリアルです。

山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまろび入る。渚漕ぐ船は波にただよひ、道ゆく馬は脚の立どをあまどはす。

山は崩れて川を埋めてしまった。「海は傾きて陸地をひたせり」というのは、海面が傾いて、高いところから低いほうに流れ込んでくるかのように押し寄せてくる津波の描写です。「土裂けて水湧き出で」は、地面が割れて水が湧出してくる液化化現象のことです。平安京の地下には巨大な地下水脈があり、琵琶湖と同じくらしいの水量が保たれているといえます。また、平安京を造営した時から、たとえば鴨川の流れを変えて土地を広げるなど大規

模な造成工事をしていますので、場所によっては泥沼状の水浸しになったのでしょう。岩が割れて谷に転がり落ちる。波打ち際にいる船は波に翻弄され、道を行く馬は立っていることもおぼつかない——。

八百年以上前に起こった出来事です、私たちが三・一一で見た情景とそっくりです。①長明はただならぬ情景を冷静に観察し、つぶさに書き残していました。

その後の記述も真に迫っています。

都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟一つとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ちのぼりて、さかりなる煙の如し。地の動き、家の破る音、雷にことならず。家の内にをれば、忽にひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ空をも飛ぶべからず。龍ならばや雲にも乗らむ。恐れの中かに恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。

都のまわりではあちらこちらの寺の堂や塔が倒壊し、無事なものはない。あるものは崩れ落ち、あるものは倒れた。塵や灰が舞い上がって煙が立ち上っているようである。大地が鳴り響き、家々がバリバリと崩壊していく音は、雷鳴がとどろくようなすさまじさだ。家の中にいれば押しつぶされそうになり、戸外へ逃げれば地面が割れて退路をふさがれる。羽がないので空を飛ぶこともできない。龍であれば、雲にのって逃げることもできる

のだが——。

そして、長明は「恐れの中かに恐るべかりけるは、ただ地震なりけり」、この世でもっとも恐ろしいのは地震だと断じています。この言葉は三・一一の震災後、メディアなどでよく引用されました。

「余震」のことにも詳しく触れています。

かくおびたたく震る事は、しばしにてやみにしかども、そのなごり、しばしは絶えず。世の常驚くほどの地震、二三十度震らぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、若しは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたそのなり、三月ばかりや侍りけむ。

このように大きく揺れる現象は、しばらくして止まったけれど、余震はしばらくのあいだ続いた。よくあることだが、有感地震が日に二十〜三十回も揺れない日はない。それが、十日、二十日と過ぎゆくほどに間遠になり、やがて「一日に四、五回」「一日に二、三回」「一日おき」「二、三日に一回」という具合になったが、およそ余震は三か月ほども続いただろうか——。

現代にも十分通用する科学的な記述です。

『方丈記』が書かれたのは長明が五十八歳の頃ですが、二十数年前の災害の様子をありありと活写しています。過去の出来事を、あたかもいま目の前で起こっているかのように現在の時制を用いて生き生きと再現してみせる

表現技巧を、西洋の詩学などでは「歴史的現在」といいますが、そんな言葉すらなかった時代に、長明はまさにそのようなテクニクを用いて『方丈記』を書いたのです。

(中略)

しかしこれだけではなく、②さらに驚くべき一言が最後に、しかもさらにと加えられていたのです。

人皆みなあぢきなき事をのべて、いささか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり、年経としにし後は、言葉にかけて言ひ出づる人だになし。

人びとはみな、やるせない世を嘆き、いくらかは煩惱ぼんのうも薄らぐようにも見えたが、大地震から月日がたち、年が過ぎると、もう言葉にして口にする人さえない――。

これは大きな災害の後、今日でもしばしば問題となる風化現象のことをいっています。災害の直後は、自然の巨大な力の前に人間の無力さを痛感し、「自然を畏れなければいけない」とか、「自分たちが慢心していたから罰があった」とか、「日頃から備えをしつかりしなければいけない」という人がたくさんいたのに、時間がたつにつれて忘れられ、二十数年たった今では、地震のことなど話題にする人さえもないということです。

直接の被害だけでなく、長期間にわたってこのような後々の人びとの行動にまで目配りを怠らないところに、鴨長明の卓越した観察眼がよくあら

われていると思います。

『方丈記』の時代と同じように、現代の日本でも自然災害が相次いでいます。地震や竜巻だけではありません。二〇一二年の七月には九州北部で集中豪雨があり、二〇一一年は同じく九州の新燃岳しんもえだけで大きな噴火がありました。同年七月には上越地方でひどい水害があり、九月には紀伊半島が台風による甚大な被害を受けました。

こうした状況を見ると、今の日本はまさに『方丈記』の時代に入ったといわざるをえません。私たちは改めて、脆弱ぜいじやくな火山列島に生きているということに自覚すべきだと思います。

時代はすでに二十一世紀。科学文明はこれ以上に何が必要かということころまで進んで、人間は地球上の森羅万象をすべて制御したような気分になっていますが、人間が生み出した文明が制御不能なモンスターに急変し、多くの人が原発事故の災害に見舞われることになりました。そこには「人災」という側面があることもぬぐえません。③それゆえに、災害というものに特別なまなざしを注ぎ、精緻に書きつづった『方丈記』がいま注目されるのでしよう。

(中略)

多くの作家が折に触れて『方丈記』を読み直し、その時々長明の文章からいろいろなものを受け取ってきたわけですが、いま改めて考えてみると、『方丈記』という古典は、人が個人の力ではどうしようもない困難に見舞われた時に読み直されているようです。

その困難とは、戦争であり、天変地異であり、現代ならば科学技術の発展に伴う大事故であるかもしれません。大きな災いや耐えがたい重圧に抗して生きていかなければならない時、人は何かしらのヒントを得ようとして『方丈記』を手にするのでしょう。

生命を脅かされるような恐ろしい経験をする、人は人生観が変わります。未来は予測不可能であることや、人間の無力さなどに思いが及ぶようになる。それは天災のみに限りません。いま、政治や経済も、先の見えない混乱した状況になっています。ついこの前まで「一億総中流」といわれていたのに、今日では「格差社会」といわれ、ごく一部の豊かな人と、毎日の暮らしもままならぬ人とに分かれつつあります。就職できない人、リストラされる人も激増しています。これもまた、個人の力ではどうにもできない災害のようなものなのでしょうか……。

未来を知る唯一の方法は、「古典に学ぶこと」だと私は考えます。東日本大震災の発生時、またそれ以降も「想定外」という言葉があちこちで聞かれましたが、『方丈記』にはその「想定外」のほとんどの事象が映し出されていました。

そうした意味で、古典は博物館のガラスケースに保管されていればよい

ものではなく、ましてや一部の研究者のもてあそびのものでもありません。多くの人びとに読まれてこそ意味があるものなのです。また、同じ人が同じ作品を読み返してみても、そのたびにこれまでとは違う新鮮な感動を与えてくれるのも古典の大きな魅力です。④古典は時代を超えて、生き続けているものなのです。

（小林一彦『NHK100分00名著』ブックス 鴨長明方丈記より。

なお、本文には省略等がある）

問一 波線a「まどはす」・b「やうやう」・c「あぢきなき」を、現代仮名遣いに直し、全てひらがなで書け。

問二 傍線①「長明はただならぬ情景を冷静に観察し、つぶさに書き残していました」とはどういうことか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 八百年以上前に起きた出来事を、真に迫る書きぶりで荒々しく表現しているということ。

イ 二十数年も前の災害の様子を、目の前で起こっていることのように詳細に再現しているということ。

ウ 現実的な問題をオブラートに包むことなく、何でもあけすけに書き表しているということ。

エ 社会に起こった事件を、長年の雅びの伝統に従って例を見ないほど

アルに描いているということ。

問三 傍線②「さらに驚くべき一言」とあるが、筆者が「驚くべき」と表現するのはなぜか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 直接の被害だけでなく、自然の巨大な力の前に感じる人間の無力さについても触れているところに、鴨長明の洞察力を感じたから。

イ 直接の被害だけでなく、地球上の森羅万象についてあらゆる視点から探究しているところに、鴨長明の分析力を感じたから。

ウ 直接の被害だけでなく、大地震から月日が経った後に起こる被害についても話題にしているところに、鴨長明の推察力を感じたから。

エ 直接の被害だけでなく、長期間にわたって人々の行動にまで目配りしているところに、鴨長明の観察力を感じたから。

問四 傍線③「それゆえに、災害というものに特別なまなざしを注ぎ、精緻に書きつづった『方丈記』がいま注目されるのでしょうか」とあるが、『方丈記』がいま注目される「理由」として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 『方丈記』は多くの作家によって内容が読み解かれており、過去の出来事も現代に繋がるように解釈されているため、古典作品の中で読み直しやすい作品であるから。

イ 文明が発達した現代でも、個人の力では克服することのできない自然災害や科学技術の発達に伴う災害があるため、『方丈記』に描かれた出来事を読み直すことで何かしらの手がかりを得たいと考えるから。

ウ 「想定外」の出来事が多く起こる現代では、先の見えない混乱した状況に人間の無力さを感じることが多いため、人生の無常観を描いた『方丈記』を読むと特に共感できるから。

エ 人は生命を脅かされるような経験をするとな人生観が変わるため、『方丈記』を読んで普遍的な生き方の手がかりを得ることで、安定した生活を手に入れられるから。

問五 傍線④「古典は時代を超えて、生き続けているものなのです」とはどういうことか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 古典は「想定外」の事象を映し出す貴重な文献であり、博物館のガラスケースの中で大切に保管されているということ。

イ 古典は読み直されることを前提として書かれており、研究者が同じ作品を何度も読むことで内容が理解できるということ。

ウ 古典は未来を予知するものとして現在の学びに活用されており、多くの人々が必要としているということ。

エ 古典は未来を知る唯一の方法として多くの人々に読まれ、折に触れて新鮮な感動を与えてくれるということ。